

KOMAZAWA X HOSEI 駒澤大学3 - 1法政大学

2点目のPKを蹴る原。蹴る時、「特に気負いはなかった。勝利にむけ、みんなの思いをのせて蹴った」と試合後に話した
(川崎篤彦撮影)



気持ちで掴んだゴール 全員で勝ち取った白星！！

上回った「気持ち」

「勝つしかない」。前節の引き分けによつて法大に首位の座を譲ってしまった駒大の気持ちは、いつにも増して一つになっていた。

課題となっていた攻撃に対する意識の高さがこの日の駒大から感じられた。2トップの赤嶺・原はロングボールのターゲットになるだけでなく、サイドに開いてのキープで見方の攻め上がり促進させる。また、駒大サッカーの持ち味である前線からのプレスを積極的に敢行し相手のパスミス誘発。こぼれ球を中盤が拾い高い位置からの攻撃で相手ゴールへ迫る。得点こそ原のPKによる1点、シユート数は共に一本に留まったものの、前半7分の白嶺の先制点、そして後半33分の田谷の勝利を決定付ける得点はそれぞれ2人が放ったシユートを詰めたもの。全得点に絡んだFWの動きは非常に効果的だったと評する。

「気持ち」を随所に発揮し、リードをしても首位のチームとの対戦となれば「相手の時間帯」というものは訪れてしまふ。前半25分にコーナーキックから1点を返すと、得点ランクトップの井上を擁する法大攻撃陣の勢いはさらに加速していき駒大ゴールに襲い掛かる。しかしそこにはリーグ最小失点を誇る駒大守備陣が立ちはだかる。筑城を負傷で欠き、代わって石井が起用された最終ラインも目立った破綻は見せなかった。「ゴール前でしっかりと守る意識がはつきりしていたし、慌てることもなかった。廣井の言葉が最後まで集中を切ることのなかったこの日の守備を物語っている。苦しい時間帯があったのは事実。だがそれを凌いだことも事実である。」

前半の早い段階での得点、前線でのプレス、集中したディフェンス、そして勝利への執念、自分達の、駒大サッカーを発揮した彼らの姿がそこにあった。「(最後も)勝つことしか考えていない。この主将牧野の意気込みはチーム全員のものでもあるはずだ。最終節、筑波大戦でもこのサッカーを披露することができれば、リーグ制覇を成し遂げた駒大の姿を想像することは難しくない。」

(斉藤 卓也)